

# 三歳の頃の私

# 108



もう50年程前に死んでしまった父。伊勢長之助のことを、しきりに考える夏だった。記録映画の構成・編集者だった父が、戦時中にインドネシアでかかわった国策映画のことを描いた新作。

『いまはむかし～父・ジャワ・幻のフィルム～』の試写会に取り組み、父の写真と向き合っていたからかな。

映画の中で使った父の写真は4枚。一枚は、日映ジャワ支局のスタッフとの集合写真。一枚は、国策映画の撮影現場でのカメラマンとの写真。一枚は、生涯一筋にやり続けた編集作業中の写真。そして、あと一枚は三歳の時の私を膝元に抱いた写真だ。中でも一番気になる写真は、この、幼い私と父が写っている写真。実は、父と一緒に写った写真は、この一枚しかない。

ちょうど私が三歳の頃、父は家を出てしまい、共に暮らしたことがなかったからだ。私の手元にあったその写真を新作の映画に使ったことで、まじまじとその一枚の写真に向き合うことになる。

写真の中の父は三十代後半。どこか遠くを見て、物思いにふけている様子だ。見ている先は、戦時中のジャワだろうか……。国策映画を創り続けたその時代、良かれと思って創り続けたプロパガンダ映画が、結果として、ジャワの人々を戦争に巻き込むことになってしまったことを、きっと考え続けたに違いないから。

父はとにかく、映画が好きだった。フィルムに触れていることが、生きることの全てと言っている程、映画にとりつかれていた。戦争の時代も、戦後も、そんな風だった。

「時代の流れに押し流されながら、映画創りに“しがみつくように”生きて、死んだ……」

と、私は映画の後半で父のことに触れた。でも、“しがみつくように”生きて、死んだのは、父だけでは無かったに違いない、と思ひ直し、

「時代の流れに押し流されるように生きて一人ひとりのこと……」

と、最後のナレーションに書き添えた。

一番よくわからないのは、「今」と「私」のことだと思う。

同じ写真の中で、三歳の頃の私は、じっとこちらを見ている。

三歳の私が、じっと「今」を「私」を見据えている気がする。

三歳の頃の私の方が、「生きる」ことや「いのち」のことに、今の私よりも、ずっとピュアであったに違いない。

「インナーチャイルド」という言葉があると教わった……。自分の中に生きている子どもの頃の自分、ということだろうか？

編集が進むにつれ、新作『いまはむかし』の定点は、三歳の頃の私の眼差し、のような気がしてきた。

あの戦争に加担した父が、戦後間もなく生まれた私に名付けた「真一」という名前には、強い思い入れがあったのだと思う。

「もう二度と戦争を做的是いけない」と。

三歳の頃の私が、じっと「今」を「私」を見つめている。

伊勢 真一